涼しくパーティーをどうぞ。レストラン最奥のクーラーを新調。クラブハウス、周辺の環境整備着々と。

クーラー

クラブハウス・レストランの最奥部（南側）を冷やすクーラーが老朽化し、夏場の利用者から苦情が寄せられていたが、そのクーラーの新調が実現した。主にコンペ後のパーティーなどに使われる、レストラン奥のエリアをカバーしていたが、年と共に性能が落ち、扇風機との併用で夏の暑さを乗り切ってきた。

夏の暑さが激しくなってきたこともあって、「暑すぎる」「涼しくならないか」などの苦情が寄せられていた。このため、大型クーラーを新調し、夏の暑さにそなえることになった。これで、コンペ後の風呂のあと、パーティーで涼んでから帰ることが出来るようになりそうだ。

太郎松

松食い虫の被害にあって、この冬に伐採した赤松は400本にのぼっているが、クラブハウスの玄関前の二本のうち、玄関に向かって左側の「太郎松」も、ゴルフ場開場とともに歩んできた57年の生涯を閉じた。松はお客様の来訪を「待つ」とかけられて、開場に併せて植えられた。右側の松は、開場三年目に枯れてしまい植え替えられて「次郎松」と呼ばれてきた。

中には「夫婦松」と粋な呼び方をするメンバーもいたが、太郎は松食い虫という〝天敵〟には勝てなかった。次郎松の方もかなり被害にあっており、そう遠からず太郎の後を追うことになりそうだが、開場時をしのぶものがまたひとつ消えてしまった。

植え込み

クラブハウス前に二面ある練習グリーンの周囲などに植えられていた植栽が撤去された。撤去されたのは練習グリーンの周囲のほか、中コース1番ティーグランド前、トイレ横、南コース1番のフルバックとレギュラーティーグランドの間の植え込みの間の計3カ所。

コース内道路の見通しを良くするのと、臨機の植え込み管理がしにくい状況を改善するため。クラブハウス前がスッキリした、夏場に不揃いの新芽が伸び放題になっているよりずっといい等という声が聞かれている。

雪少なくしてもクローズ増え、大風で倒木・・・。

今冬は正月に雪に見舞われたが、1月中は昨年6回あった雪によるクローズが3回で済んだ。やれやれと胸をなで下ろしたのもつかの間で、2月に入って8回にものぼってしまった。それも、ドカッと雪が降ってプレーが不可能になるのではなく、降雪量は数㌢なのに、低温でオープン時刻までに雪が消えず、クローズせざるを得ない日が多かった。夏の暑さも年々、異常性を増しているが、降雪事情にも有り難くない変化が出ているようだ。

また、2月13日には嵐とも言える大風が吹き荒れ、コース内の太い老木がカート道などに倒れたり、枯れ枝がコース全体にちらばったりした。コース管理要員だけでは対処し切れず、社員総出でコース内の枝拾いをして、翌日のオープンにこぎつけるなど、気の抜けない冬だったようだ。

開場記念祭コンペ盛況、早くもキャンセル待ち。

第56回目の開場記念祭コンペは2月5日から受付を開始したがすでにキャンセル待ち状態となった。今年のコンペは4月12日、13日の2間にわたって開催されるが、出来る限り多くの方々が参加出来るよう調整を進めているので、これから参加を希望されるメンバー様はフロントへお声かけいただきたい。

競技方法はハーフコンペ（ペリア方式、ダブルパーカット、上限20）,1-10位、以下5,10の飛び賞、56回にちなんで56位賞、塩原ゴルフクラブの決算期にちなんで59位賞が出される。

レストランでは新しい企画を計画しているようなので、楽しみにしていただきたい。

【雑草博士のグリーン談義】

小笠原　勝(前宇都宮大学教授)

なぜ、スズメノカタビラはグリーンの雑草になっているか？

私たちは普段、何気なしに芝生の上でゴルフを楽しんでいますが、そもそも　わが国には昔から芝生という植生空間があったのでしょうか？「芝居」という言葉は芝生に座って猿楽などの野外劇を見ることに由来することから、芝生は平安の頃から人々にとって身近な存在であったと考えられます。一方、河川敷や堤防でも見かけることができますが、小さなコロニーに過ぎません。広大な土地がイネ科草本のシバ(芝)で覆われている場所(芝生)は宮崎県の都井岬や宮城県の牡鹿半島など、ごく一部の場所に限られています。つまり、日本には、ゴルフ場のような広い芝生は本来的には無かったことになります。温暖で多雨な気候帯に位置する日本では、多種類の植物が光や養分の取り合いをしています。シバは負けてしまい、最終的に残るのがブナやマツになります。では、なぜ宮崎県の都井岬でシバは生き残っているのでしょうか？ヒントはウマです。都井岬には野生の馬が生息しており、馬による高い踏圧と採食圧がかかっています。成長点が地表にある芝はこれらのストレスに耐えることができますが、大型の草本や双子葉植物は次第に衰退します。すでに、お気付きかと思いますが、プレーヤーの踏圧やモアによる刈り取りはウマと同じ役割を果たしていることになります。

次に世界の植物について考えてみましょう。正確な数字は分かりませんが、およそ 20 万種の植物が現生していると考えられています。そのうち、農地に生育する雑草は世界で 6 千種ほどです。肥沃で日当たりや水はけの良い農地は植物にとって好適な環境のように思えますが、過剰な窒素を苦手にする植物もいますし、日陰を好む植物もいます。何よりも頻繁な土壌撹乱(耕耘)は植物の生育には大きな障害になります。その結果、19 万 4 千種の植物は農地で生育することができなくなったと考えられます。日本の水田に生育する雑草はさらに減って数百種類ほどに過ぎません。湛水によって土壌中の酸素濃度が抑えられているからです。

そしていよいよゴルフ場です。ラフやフェアウェイに生育する雑草は 30 種ほどありますが、グリーンには、スズメノカタビラ、メヒシバ、チドメグサなどほんの数種類の雑草しか生育することができません。グリーンに生育する植物の種数は地球に生育する全植物の 1/10 万に過ぎないことを意味しています。グリーンの雑草はまさに選ばれし雑草と言っても良いのかも知れません。これはグリーンの生育環境が非常に特異的であることを示しています。塩原 CC の近くに牧草地があります。牧草の年間の刈り取り回数は 3～4 回です。それに対してグリーンでは、雪や雨の日を除き、ほぼ毎日、刈り取りが行われています。そして刈り込みの高さも尋常ではありません。わずか 3～5mm です。グリーンは地球で最も刈り取りストレスのかかる場所といえます。そこで旺盛に生育しているのがスズメノカタビラと呼ばれるイネ科の一年生草本です。グリーンは多くの植物にとって決して住みやすい環境ではありませんが、刈り込みや踏圧に強いスズメノカタビラにとっては、競争相手はベントグラスだけですし、しかも春と秋の一時期だけの間借ですから、好適な環境なのかも知れません。

雑草に対する理解が深まれば、芝生に対する見方も変わってくるに違いありません。今回は、導入編として選ばれし植物だけがグリーンの雑草になっていることをお話ししました。

【中里鉄也の目・Q&A】

Q.芝が枯れている冬季は、アプローチショットが苦手で恐怖心さえ出ることがあります。克服するにはどうしたらいいですか？

A. 冬季の枯れた芝からのアプローチは、苦手意識を持つ方は多いですね。
サンドウエッジよりもロフトのないクラブでヒールを上げ、パターの様に転がした方がストレスなくアプローチできます。詳しくお話ししていきましょう。

※ ポイント① 状況の把握とクラブの選択

Q ： 芝の状態はどのように観察したら良いでしょう？
プロ ：枯芝は薄くて地面が硬い事が多いです。（枯芝が寝ている為、クラブをボールの下に入れにくい。）
ボールが地面に沈んでいるか、浮いているかを確認しましょう。地面が硬い場合はダフリを嫌がりトップしやすいので注意が必要です。

Q ： クラブの選択は？
プロ ： ロフトの大きいクラブ（サンドウエッジなど）は、ダフリに弱いので、ピッチングウエッジや９番アイアン又は８番アイアンを使って、転がしを意識してパターに近い感覚で打てるクラブを選ぶ方が良いですよ。

※ ポイント② 打ち方のコツ

Q ： スイングは？
プロ ： 大きなスイングはミスにつながりやすいので、コンパクトなスイングを心がけましょう。
手首の使い過ぎに注意！

※ ポイント③ メンタル面の強化

Q ： 苦手意識を取り除くには？
プロ ： 打つ前に、成功するイメージを持つと良いですよ。
ポジティブなイメージは緊張をほぐして、集中力をアップさせます。
ミスを怖がらないで積極的にチャレンジしてみましょう。
もしミスしてしまったら、原因を見つけて、次に繋げる事が大切です。

Q ： 試してみたが、上手くいかないのですが？
プロ ： 一度レッスンを受けてみませんか？
アプローチだけでなく、自分の弱点を直して、効率的にレベルアップを目指しましょう！

最後に！
全てのアプローチにおいて、ボールとクラブフェースのコンタクトを見る事が大事です。

那須の小天狗―小針春芳伝 29

井上安正

第十八軍司令官の安達二十三中将はBC級戦犯として終身刑の判決を受け、最後の復員線を見届けたて自決した。二三九連隊の生き残りの証言によると、収容所ではすべての部屋を回り、「人として耐える限度を遥かに超越せる克難敢闘を要求した」と詫びたという。マラリアなどによる収容所内での死者だけで一千百四十八人にのぼった。東部ニューギニア戦線に投入された第十八軍の将兵は十六万人、西部ニューギニアを含めると二十万が戦闘に参加、帰還者は二万人に過ぎなかった。

小針春芳が帰還したのは一九四六（昭和二一）年だったから、おそらく最後の復員船で故国の土を踏んだと思われる。命をつなぐための残り物のイモを奪い合い、現地人のヤリで突かれて命を落とし、あるいは最後に渡された手榴弾で自らの命を絶った戦友。戦友の亡骸をとむらうために、墓穴を掘った時のサンゴ礁が隠れていた地面の硬さを、小針は忘れられなかった。

大岡の「野火」にこうある。「住民の立ち退いた家々は戸を閉ざし、道に人はいなかった。敷きつめた火山砂礫が、褐色に光り、村をはずれて、陽光の溢れる緑の原野にまぎれ込んでいた。臓腑を抜かれたような絶望とともに、一種陰性の幸福感が身内に溢れるのを私は感じた。行く先がないというはかない自由ではあるが、私は生涯の最後の幾日かを、軍人の思うままではなく、私自身の思うままに使うことが出来るのである」。結核を患った主人公が、病院に受け入れてもらえず、六本のイモを渡されて中隊を追い出されたあと、長い単身の彷徨に踏み出した時の心情を描いた一節である。

サンゴ礁混じりの硬い土に墓穴を掘った小針の心情に通じる戦場の悲惨がある。戦後、ニューギニア戦線の悲惨は「ジャワの極楽、ビルマの地獄、死んでも帰れぬニューギニア」と喩えられた。四百人の小針の部隊で生還し得たのは十三人。小針はマラリアの高熱のせいでフィリピン・マニラへの転進からはずれ、海の藻屑と化さずに済み、高熱にさいなまれながらも、故郷に生還する幸運に恵まれた。もともと、生来の色弱という不運が救ってくれた命でもあった。

小針本人が言い残した「人間嫌い」は、死地で味わった苦難、不条理の影がもたらした心の屈折の産物でしかなかっただろう。生涯、自分のボールに「死（4）線」を超えて「5」を印字したのは、ニューギニアの地に散った戦友への鎮魂の思いも込められていたはずだ。そして、「傲るまい」と自分に誓い、生涯それを守った。それが、小針が江場友幸に告白した「人間嫌い」の本質だったとすればすべてが腑に落ちる。

そして、二〇二〇（令和二）年七月、小針が若き日に流した血と汗が染み込む霞が関カンツリー倶楽部で二〇二〇（令和二）年七月、東京オリンピックのゴルフ競技が開催された。

（おわり）

あとがき

北九州・小倉で勤務していたころ、勤め先の代表者としてメンバー入りを許してもらったおかげで、門司ゴルフ倶楽部（福岡・北九州市）でプレーを楽しむことが出来た。その時、何人もの地元メンバーからよく聞かされた。曰く……。

ここは、あの中部銀治郎が父・利三郎に連れられ、子供の頃から練習に通っていた。中学生になって、クラブ競技に出させてもらったところ、あっさりと優勝をさらってしまった。高い鼻をへし折られた、腕に自信の古参メンバーからブーイングの嵐が起きた。銀治郎の長兄・一次郎、次兄・幸次郎も相当な腕前で、利三郎は「お前らのゴルフ場を作ってやる」と作ったのが下関ゴルフ倶楽部（山口・下関市）です。銀治郎は下関で鍛錬し、日本アマを六回制し「プロより強いアマ」となった。

中部家が大洋漁業（現・マルハ）の創業家筋とは知っていたが、いくらゴルフの才がある息子たちを持ったにせよ、専用ともいえるゴルフ場を作ってしまうとは、都市伝説のたぐいではないかと聞き流していたが、実話だった。しかし、銀治郎が幼少の頃、ぜんそくなどで病弱だったため、利三郎が住まいのあった下関から関門海峡をはさんだ門司まで、丈夫な体にするために連れて来ていた。もちろん、二人の兄も一緒だったろう。一次郎は日本アマを一回取り、幸次郎もトップアマとして知られた。

実際にプレーしてみると、門司と下関では趣が正反対である。門司は山あいに作られた箱庭のような景観美を備えている。下関は響灘からの風を防ぐ松林に囲まれてはいるが、広々としたリンクスコースだ。響灘の波の音が聞こえてくるホールもあり、攻略するには多彩な戦略性が求められる。プロより強いアマチュアゴルファーが生まれたわけがわかるコースだ。

このエピソードを紹介したのは、子供のためにゴルフ場まで作ってしまう中部家の資力を伝えるためではない。小針春芳のゴルフ道を取材して感じたのは、伝統をそなえたゴルフ場を開設した人々、そこで技を磨いたレジェンドといわれるゴルファーたちは、文化の創造者だったということである。中部銀治郎や中部家の人々もその一翼を担っていたと思うからだ。そうでなければ、「ゴルフはあるがまま」と、どんなにライが悪くても、ボールはあった所からしか打たなかった銀治郎を生むことはなかったろう。

霞が関カンツリー倶楽部の開設を思い立った発智庄平名・武平庄平は、一八六四（元治一一）年に川越市笠幡の大地主の家に生まれた。埼玉師範を卒業し、一九〇〇（明治三三）年に黒須信用貯蓄組合頭取、一九一四（大正三）年に霞ヶ関村長に就いた。東松山にあった埼玉育児院を、自ら提供した笠幡の土地に移設し養護教育にも私財を注ぎ込んだ篤志家であり、社会事業家であった。

霞ヶ関カンツリー倶楽部の造成には、十六万坪（五十二・八㌶）という広大な土地を三年間は無償で貸し付け、建設費三万円を無利息で貸与している。白米一升が十八銭という時代のことだ。そして、特筆すべきはここに東京ゴルフ倶楽部を移転してはという提案を、発智が言下に拒否したことである。

その裏には、社会事業家としての発智の矜持が脈々と波打っていた。発智のゴルフ場開設の真のねらいは、貧しい笠幡の小作農家や零細農家の子弟たちに、キャディーというアルバイトの場を作り、少しでも生活資金を稼がせてやりたいという、社会救済の大構想だった。ゴルフ場を作るだけでなく、その運営でも主導権を取らなければ意味がなかったわけだ。二〇二〇東京オリンピックのゴルフ会場として、世界の一流ゴルファーが集う場になることは、発智の遠大な構想の行き着くところなのかもしれない。

那須ゴルフ倶楽部にしても、山あいの湯治場を別荘地として生まれ変わらせるべく、実業家、文化人たちが発起した賜物だった。今、クラブハウスのレストランには、年を重ねたとはいえ、プレー後の談笑に身をまかせる人々の間をゆったりとした時が流れている。

“大正五強”。戸田藤一郎、中村寅吉、小野光一、林由郎、小針春芳、それにもう一人の大正生まれ、石井朝夫の六人はそろってキャディーを経験してプロの道に進んだ。しかも、小針、林、石井は手作りのドライバーで、こっそり素振りをしたり、ボールを打ったりしてゴルフの重い扉をこじ開けた。山の小針はツツジの灌木、平地の林は竹、海の石井はサルスベリの木だった。その取り合わせが興味深い、単なるレジャーやスポーツの場を超えたゴルフコースで、少年達が身をもってゴルフ文化を育てたのである。

明治生まれの宮本留吉は、日本ゴルフの黎明期に偉才を放った。キャディーを経てプロとなり、我が国最古のプロトーナメントである第一回日本プロで優勝、日本人プロとして初の海外遠征のハワイアンオープンに参戦、浅見録藏と初の米本土遠征に挑んだ。日本オープン六勝は大会の最多記録だ。宮本はプロになって以来、手作りのクラブで試合に臨んだ。五十歳の春、自宅に工房を構えオリジナルクラブの製作に打ち込んだ。

時間をかけ工芸品ともいえるクラブに仕上げたのが「トム・ミヤモト」である。「すぐに欲しい？なんぼ頑張っても造れるクラブは限られているんや。待てなかったらよそのを買えばいいやないか」。宮本はクラブを作ってもらえればいいだけの客は、顔なじみの会社重役でも追い返したという。その職人気質は小針の同行者と言うべき江場友幸と見事に重なる。

半世紀を超え小針との同行が続いたわけを、江場は「ウマが合ったとしか言いようがありません」と言葉少なだ。しかし、ゴルフの技とクラブ造りの違いはあるが、その探求心の深さ、一番を目指す執着心の強さは通底し、だからこそ、ゴルフ文化を担うことが出来たのである。そこに、日本ゴルフのアイデンテティーがあろう。

小針は「早く世界メジャーの制覇を」と後輩達に檄を飛ばして逝った。その年に女子ではあるが、若き女子プロ・渋野日向子が全英女子オープンで優勝した。樋口久子の全米女子プロ優勝以来、実に四十二年ぶりの世界メジャー制覇だった。

小針春芳の出自や人間形成に大きな影響を及ぼす幼少期に、「人間嫌い」になるような出来事は何もなかった。貧しさはあったが、あの時代は大なり小なり、誰にでもあった。自分が体験し、大岡昇平が描いた過酷な戦場体験と、「死に残ってしまった」と言わしめたある種の負い目がそうさせたに違いない。

ありきたりで陳腐のそしりを覚悟して言わせてもらえば、戦争は生涯癒えることのない傷をもたらす。その小針が修業の日々を送ったゴルフコースで、「平和の祭典」が開かれたのは奇縁というほかない。加えて二〇二〇（令和二）年は、福井覚治が日本で初めてのプロゴルファーとなって百年目だった。ギャラリーの歓声が天上のレジェンドたちに、心地よく届いたに違いない。

▽参考文献・資料

「青木小一〇〇年誌」（黒磯市立青木小創立百周年事業実行委員会）
「那須ゴルフ倶楽部五〇年史」（那須ゴルフ倶楽部編集特別委員会）
「那須温泉史」（那須町教育委員会）

「季刊『Choice（チョイス）』231号」ほか（ゴルフダイジェスト社）
「私の生きた刻（とき）」・下野新聞連載、井上孝男記者）
「野火」（大岡昇平著・新潮文庫）
「アマチュアゴルフ」（大岡昇平著・潮出版社）
「ゴルフ一筋」（宮本留吉著・ベースボール・マガジン社）
「ワンパット・ゴルフ」（小針春芳著・報知新聞社）
「那須野が原入門講座」（石ぐら会・若月延雄会長）HP
「日本プロゴルフ殿堂」HP（一般社団法人日本プロゴルフ殿堂）
（国内外ゴルフデータベース、ゴルフ関連ネット・サイトを参考にさせていただきました）

編集後記

前回からコラム・【雑草博士のグリーン談義】を寄せていただいている前宇大教授の小笠原勝さんの著書「雑草害」（幻冬舎ルネッサンス新書）を読ませてもらった。雑草とはなんぞやに始まり、ゴルフ場のグリーンの難敵・スズメノカタビラの生態から、「雑草管理で地域振興」まで、雑草にからむ問題点の解決策が広く、わかりやすくまとめられている。スズメノカタビラはなぜ難敵かは、他家受粉と自家受粉を並行してやれるうえに、受精をせずに無融合生殖をやっている可能性もあって、芝の強害雑草になっているのだという。門外漢が読んでもおもしろい話がてんこ盛りだった。

井上安正